第58回 中学生の「税についての作文」

藤沢税務署長賞

憧れの大人

茅ヶ崎市立鶴が台中学校　3年　**益 子 八愛香**

『どんな大人になりたいか』そう問われても、今までは何も思い浮かばず困っていた。しかし今回、税について調べたことで、その姿が思い描けるようになったと感じる。

小学五年生の時のことだ。前日の夜からの腹痛が次の日の朝になっても良くならず、朝一番でかかりつけの小児科に行くと、その場で盲腸を疑われ、大病院での検査を勧められた。大病院に行くと、すぐに手術をすることになり、気づいたときにはベッドの上だった。

「発見が早くてよかった。」両親がベッドサイドでそんな話をしていたが、当時はお腹が痛いだけでなぜ手術をするのかわからなかった。

退院日、私は五日間入院したので、お金がとてもかかったに違いないと申し訳なく感じていた。しかし、請求書をのぞいたときに三千円もしなかったため、思わず「安いね。」と口にすると、「大人の医療費は三割の自己負担があるけど、子供は小児医療証のおかげでその三割もなくなり無償になっていて、払うのは食費だけだから。」と親が言った。

では、普段の医療費は一回でどの程度かかっているのだろう。今回、最近受診した皮膚科の医療費明細書で計算してみると、もし全額自己負担だったら三千円以上かかっていたことがわかった。今までは具合が悪くなるとすぐ病院に行っていたが、自分が知らないだけで多くのお金が発生していたことに気づき、衝撃を受けた。

盲腸は発見が早ければ死亡率は0.1%以下だが、受診や治療が遅れると死ぬこともある。私の盲腸が早く治療できたのは、体調が悪いと感じたときにお金の心配なしに迷わず病院に行けるような制度が整っていたからだ。その制度の根幹こそ、税金である。

もし税金で医療費保険で賄われておらず、毎回かなりの額を支払っていたならば「このぐらいの腹痛なら我慢できる。」と考え、手遅れになっていたかもしれない。親の言葉はそういう意味だったのだ。そう思うと、私の命が税金によって救われていたことを強く実感する。

また、他の人の税金についての作文を読むと『自分や大切な人、地元が税金によって助けられた。本当によかった。』と書いている人は自分以外にも数多くいた。税金はきっと今この時もさまざまな方法で誰かを助けているのだろう。そして、その税金は多くの人の力により支えられている。私はそのことに改めて気づくことができ、そんな人々をかっこいいな、と思った。

『どんな大人になりたいか』今後、そう問われたなら、「命を救ってもらった恩を返すことのできる、かっこいい大人の一人になりたいです。」と胸を張って答えたい。

藤沢税務署長賞

税金は恩送り

茅ヶ崎市立梅田中学校　3年　**山 口　舞**

「教科書は、税金でまかなわれているのだから大切にしなよ。そうやって床に置いておくと踏まれるよ。」この言葉を聞いて私ははっとした。隣の子が教科書を何冊か床に置いていて、それを先生が注意したのだ。先生のおっしゃったとは正しいと思う。義務教育である小・中学校全ての教科書の裏表紙には実際に「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と書かれている。でも、私自身、教科書に対して何かを感じたことはなく当たり前にあるもだと思っていた。なので、教科書のページが折れたり、破れたりなどしても私は気にしていなかったし、教科書に載っているイラストをおもしろく落書きしている友達とも一緒に笑い合っていた。しかし、先生の言葉を聞いて「もっと教科書を大事に扱うべきだ。」と考えるようになり、それ以来、私も教科書を粗末に扱っている子がいたら注意するようにした。やはり私には教科書を粗末に扱うという行為が、教科書に込められた思いを裏切ってしまっているように感じられたのだ。

また私は「学校」という「学ぶ場」が好きだ。そんな学校が税金で建てられていて、授業を何の不満もなく快適に受けることができる。なんて素晴らしいことだろう。世界では、授業どころか学校へ行けない子どもが約二億四千四百万人もいるのに。私たちの日常は税金によって支えられているのだ。このことを忘れずに生活することが今、私たちにとって必要なことである。そして大切なことは納税をするということだ。現在日本を引っぱってくれている大人が税金をきちんと納めているから、私たちは仲間と学校で学び合えている。だから私たちの次の世代にも私たちがしてもらったこと、またはそれ以上のことを「恩送り」することが大切だと思う。そして恩送りを形として次の世代にするためにできることが、私たちが将来納税をするということである。

私たちの生活の中で税金はかかせない、なくてはならないものだ。でも、私たちはまだ消費税でしか税を納めることはできない。常に支えられている立場であるそんな私たちが将来、日本の担い手として社会に貢献できる日が来るまで、私は成長し続けていきたい。